ルイ7世による初期ゴシック大聖堂建設への関与の実態について

A STUDY ON THE ACTUAL RELATIONSHIP BETWEEN LOUIS VII AND THE CONSTRUCTIONS OF THE EARLY GOTHIC CATHEDRALS

加藤 耕一*

Koichi KATO

The constructions of most of the early gothic cathedrals were started under the reign of Louis VII. This paper investigates the actual relationship between Louis VII and the construction of the cathedrals.

Regarding the finances of the constructions, Louis VII gave economic aid in some case, but they weren't the great patronages. As for his power of ruling over the "royal bishopric", it reduced under his reign. Thus, Louis VII wasn't the great patron of the early gothic style. The fact that the king renounced his right to deprive the bishops' possessions might help the construction of the gothic cathedrals.

Keywords : *Early Gothic Style, France, Capetian Dynasty, Saint-Denis, Louis VII, Royal Bishopric*

初期ゴシック様式、フランス、カペー王朝、サン＝ドニ、ルイ7世、王立司教座

1. 序

ゴシック様式とその社会的背景¹⁾、思想的背景の関係性を指摘した先行研究は数多い。本稿は、なかでもサン＝ドニ大修道院との関連でしばしば指摘される、フランス王権と初期ゴシック様式の関係性を再考察しようとするものである。

初期ゴシック期(1144-1194年²⁾)において、フランス国王の直轄地はイル＝ド＝フランスおよびその周辺に限定されていた。この地方にはサン＝ドニを筆頭に初期ゴシック様式のモニュメントが多数存在し、ゆえにゴシック様式はイル＝ド＝フランスで誕生したといわれる。2つの領域が重なり合っていることから、先行研究では直接・間接を問わず、フランス王権とゴシック様式の関係性が示唆されてきた³⁾。初期ゴシック様式が誕生した地域とフランス王家の直轄地とは、ともに〈イル＝ド＝フランス〉と呼ばれるが、ここで言われる〈イル＝ド＝フランス〉の概念が示す領域は曖昧であり、実際には王の直轄地が極めて限定された狭い地域であるのに対し(地図1参照)、初期ゴシック大聖堂が建設された都市は、王領の周辺地域にまで広がっている。しかしながら「最初のゴシックはイル＝ド＝フランスという一つの限られた領域——より正確に言えばカペー君主の領土——と驚くほど同一視される⁴⁾」とする言説が存在するほどに、両者の領域的な類似は、実際にはその境界線を同

一にしているわけではないにも拘わらず、初期ゴシック様式とフランス王権の漠とした繋がりを示唆し続けるのである。

地理的な平行関係を示すことによって漠然と両者の繋がりを示唆するにとどまらず、本稿では、王領で誕生したことが初期ゴシック様式にとって「好条件⁵⁾」といえるものであったのか、そしてそのことは「国王芸術⁶⁾」としてゴシック様式の性質を決定づけるものであったのか、などの点を明らかにしたい。すなわち両者の関係性の実態を再検証し明らかにすることが、本稿の目的である⁷⁾。

2. ルイ7世と初期ゴシック様式

ゴシック様式の誕生とフランス王権との関わりを考える上でもっとも重要な国王は、ルイ7世(在位:1137-80年)である。初期ゴシック大聖堂と呼ばれる大聖堂は、ほとんどすべてがルイ7世の治世に着工され主要部分の建設が進められている⁸⁾。

ルイ7世は先王ルイ6世の次男であり、4歳年上の兄フィリップの存命中はパリ司教座学校において聖職者になるべく教育を受けていた⁹⁾。しかしフィリップが急逝したため、急遽若いルイが世継ぎの王太子として呼び戻され、兄の死の6年後には、父王の死により即位することになる¹⁰⁾。

若年期に聖職者としての教育を受けた彼の素養、さらに1147年

本稿は、2000年度大会学術講演会で発表した「カペー王朝と12世紀初期ゴシック」をもとに、大幅に加筆・修正したものである。

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
研究生・博士(工学)

Research Student, Department of Architecture, Graduate School of Engineering,
University of Tokyo, Dr. Eng.

の第二次十字軍への参加、また神聖ローマ皇帝フリードリッヒ・バルバロッサとの確執により亡命したローマ教皇アレクサンドル3世や、イギリス王ヘンリー2世との確執により亡命したカンタベリー大司教トマス・ベケットという二人の高位聖職者を相次いでフランスに受け入れたことなどから¹¹⁾、ルイ7世はきわめて信仰の篤い国王として知られている。このことは、彼を大聖堂建設と結びつける状況証拠的な役割を果たしているといえよう。

ルイ7世の領土については以下の点が重要である。すなわちルイ7世は1137年、アリエノール・ダキテーヌとの婚姻により、旧来のカペー王家の直轄領であるイル＝ド＝フランスに加えて広大なアキテーヌ公領をも支配することになった。ところが1152年のアリエノールとの離婚、さらにアリエノールのノルマンディー公アンリ2世との再婚により、フランスの国土の大半はこのノルマンディー公——彼は1154年イギリス王ヘンリー2世として即位した——の支配下に置かれ、対照的にルイ7世の領土は再びイル＝ド＝フランス周辺の僅かな領地に限られることとなったという点である。フランス王権とゴシック様式の発生の関連を指摘する論は、主としてこの限られた王領周辺に初期ゴシック大聖堂が多く見られることを論拠としている。しかしながらイル＝ド＝フランスは王領としてフランス国内で特別な地位にあったわけではなく¹²⁾、むしろ領土の限定は王権の零落を示しているに過ぎないといえることができる¹³⁾。

これに対して王権とゴシック様式の誕生を結びつけた多くの論が説得力を持ち得たのは、ゴシック様式誕生の教会堂といわれるサン＝ドニ大修道院が(王家の墓所)としての特別な意味を持った修道院であったという共通認識のためと考えられる。O・ジムソンはこの認識をより一層強化するために、サン＝ドニ大修道院長シュジェがルイ7世の父王ルイ6世の治世に、如何にして王国内でのサン＝ドニの地位を高めたかを詳細に論じた¹⁴⁾。ルイ6世の下でサン＝ドニ大修道院はフランスにおける宗教的な中心となり、カペー王家とサン＝ドニとはそれまで以上に密接な関係で結ばれたという。

H・ゼーデルマイヤが王権とゴシックとの関係性を論じたときも、その主たる論拠はサン＝ドニがフランス国王の墓教会堂であったということであった。彼によれば、シュジェはゴシック様式を(国王芸術)として創造したのだという¹⁵⁾。そして起源においてフランス国王と緊密に融合していたゴシック大聖堂が、王領の拡大とともに広く伝播したという点において、「フランス王権と大聖堂との緊密な結びつきを認めなければならないであろう¹⁶⁾」とする。

しかしながら、王権とゴシック様式の関係性についてもっとも踏み込んだ議論をしたといえる上記二人の議論でさえ、サン＝ドニ及びその後の初期ゴシック大聖堂の建設が実質的に進められたルイ7世の治世については、ほとんど言及していない。そこで以下、第3・4節ではこれについて具体的な検証をすることとする。第3節では主として金銭的援助を中心とする、ルイ7世による大聖堂建設への援助の有無、第4節ではルイ7世と王立司教座¹⁷⁾の関係性の実態について検証する。

3. ルイ7世による大聖堂建設への経済援助

まず検討すべきは、ゴシック様式誕生の教会堂といわれるサン＝ドニ大修道院に関してであろう。大修道院長シュジェはルイ6世の治世には国王の顧問として信頼も篤く政務に追われていたため、サン＝ドニ大修道院のナルテックスの建設はルイ6世が没した1137

年に開始された¹⁸⁾。さらに1140年から内陣の建設が始められ、1144年に献堂式が執り行われている。すなわちシュジェはルイ7世の即位から7年間でサン＝ドニ大修道院の建設を進めたのである。彼が国王の摂政として再び国政の表舞台に立ったのは、ルイ7世が十字軍に出発した1147年以降であった。その後1151年に没するまで、特に王国内の教会に関連する問題の多くはシュジェが責任を持って解決したことが知られる¹⁹⁾。サン＝ドニ大修道院の建設期間に当たる1137－1144年にシュジェがまったく国政に参加していないということはないようであるが、政治に対する責任が比較的軽減されていた時期に、シュジェがサン＝ドニ大修道院の建設に精力を傾けていたと考えることができよう。

ここで具体的に、大聖堂建設費用の問題について考える。シュジェは『献堂録』の中で、「修道士たちの会議において、出席者たちの助言とわが君主たる国王の承認により、この事業を完成させるために[大修道院の]年収を充てることを決定した²⁰⁾」と説明している。具体的には、「祭壇と聖遺物への寄進に寄り集まった150リーヴル——うち100リーヴルは市²¹⁾が立つとき、50リーヴルは聖ドニの祝祭において集まった——と、それに加えてボース地方のヴィレーヌと呼ばれる所領からの収益のうち50リーヴル、合計200リーヴル²²⁾」が工事費用に充てられ、この大修道院の年収からの工事費用の捻出がすべての工事が終了するまで続けられた。

ここでシュジェが「君主たる国王の承認(domini regis assensu)」により、大修道院の年収から200リーヴルを工事費用に充てることを決定したと説明しながら、国王からの資金援助にはまったく言及しないことから、ルイ7世からの大聖堂建設工事への特別な資金援助は存在しなかったと結論づけられる。他方13世紀前半(1231年頃)には、ブランシュ・ド・カステューと聖王ルイ(ルイ9世、在位:1226-70年)が、サン＝ドニの新しい身廊の建設に対し、450,000リーヴルもの寄付をしているのが知られる²³⁾。シュジェが内陣を建設するのに必要としたと考えられる年額200リーヴルと比較したとき、インフレともいえるべきこの驚くべき金額は俄には参考としがたいが、聖王ルイの下で多額の寄付が存在したのは明らかであり、13世紀のサン＝ドニ建設を聖王ルイによる国家的プロジェクトと位置づけることは可能であろう²⁴⁾。これに対して12世紀のサン＝ドニ建設については、親子二代にわたる国王ルイとシュジェの緊密な結びつきにも拘わらず、この事業に対する国王からの金銭援助が存在しなかったことが注目値する。

サン＝ドニ以外の初期ゴシック大聖堂で、ルイ7世との結びつきがしばしば指摘されるのはサンリス大聖堂である。1155年頃、ルイ7世は再建工事の始められたサンリス大聖堂に関して、王国内の大司教、司教といった高位聖職者たちに宛てて、その工事費用への寄付を募る開封勅書を発効した²⁵⁾。国王の使者がこの勅書を携えて王国内を回り、王の名の下に寄付を徴収したものと考えられる。ルイ7世自身による寄付の実態は不明であるものの²⁶⁾、この勅書の存在はフランス国王の大聖堂建設に対する積極的な協力姿勢を示す重要な証拠となる。しかしながらルイ7世が他の大聖堂について同様の勅書を発効した事例は知られておらず²⁷⁾、国王による斯様な大聖堂建設の保護政策が一般的に行われていたとは考えられない。

ルイ7世が実際に大聖堂建設に寄付したことが明確な実例としては、バリ大聖堂の建設に対する寄付が挙げられる。これは1180年

になされたもので、この時ルイ7世は200リーヴルを寄付したことが知られる²⁸⁾。この額は約40年前にサン＝ドニ大修道院の建設工事において、シュジェが一年間に必要とした額と同じであり、かなり高額の寄付であったといえよう²⁹⁾。しかしながらパリ大聖堂の建設を指揮した司教モーリス・ド・シュリーは1196年、その死に際して遺産から100リーヴルを寄付したことが知られている³⁰⁾。またラン大聖堂の建設においても、建設を指揮したラン司教ゴートイエ・ド・モルターニュは1174年、やはり遺産から100リーヴル、さらに生前はおそらく20年ほどにわたって毎年20リーヴルを寄付していたことが知られており³¹⁾、その寄付の総額において国王のパリへの寄付額を上回ったことは確実である。これら二人の司教が遺贈した100リーヴル、また約50年後にルイ9世がサン＝ドニに寄付した450,000リーヴルと比較したとき、ルイ7世が寄付した200リーヴルはあまりに見劣りするといわざるを得ない。

上述の実例以外で、ルイ7世が初期ゴシック大聖堂の建設工事に関連して何らかの金銭的援助をした事例は知られていない³²⁾。したがってルイ7世が初期ゴシック大聖堂のパトロンとして、これを積極的に援助したと考えることはできない。ここでは、大聖堂建設協力の名目での寄付・援助だけを考えて、それ以外の名目での司教座への寄付が存在する場合もあるが、それは国王との司教との政治的な関係といえる。仮にその寄付が大聖堂建設に援用されたとしても、それは司教側が都合よく利用したに過ぎない。ルイ7世の大聖堂建設への積極的な姿勢に限定するならば、パリとサンリスに見られた例外的な協力姿勢が存在したのみと結論づけられよう。

4. ルイ7世と王立司教座

前節で見たように、ルイ7世が初期ゴシック大聖堂の建設を積極的に援助した事例はごく僅かである。それにも拘わらず、カペー王権と初期ゴシックの密接な繋がりを論じた先行研究が、強い説得力を持ち得た要因としては、ジムソンが述べた次のような見解があったと考えられる。

「フランス王国は、…中略…「王立の」司教区としてフランス王冠に付属したいくつかの大きな司教管区に取り巻かれていた。これら6人の統治者——ランスの司教、ランとラングレとシャロンとボーヴェとノワイヨンの各司教——は王国の公や伯であり、この資格において大きな封建諸侯であり、彼らの領地をあわせると王領の大きさをはるかに凌ぐものであった。他のすべての封建諸侯と同じく「王立」司教区の占有者たちは国王の封臣として忠誠を誓った。しかも教会関係の封土は世襲制ではなかったで、それらの司教を任命する王の権限は彼の権力を大いに増大させた³³⁾。」

ゼーデルマイヤもまた、まったく同様に初期ゴシック大聖堂建設の背景として王立司教座の存在を強調している³⁴⁾。本節ではまず、王立司教座の実態とその歴史的背景を概観し、さらにルイ7世と王立司教座の関係が如何なるものであったかを検証することとする。

王立司教座について考える上では、ルイ7世が即位した半世紀ほど前の、ローマ教皇グレゴリウス7世（在位：1073-85年）によるグレゴリウス改革が無視できない。これは世俗権力による司教座支配に対抗した叙任権闘争として知られ、特に俗人による司教叙任が結果として巻き起こす聖職売買を強く批判したものであった。グレゴリウス改革は1122年のヴォルムス協約により終結し、その

後、国王による司教座支配のあり方は変容していく。それ以前に世俗権力、すなわち中央の国王、地方の諸侯が司教座に対して有していた権限は、主として①空位教会収入取得権、②聖職者遺産没収権、③新司教選任権の3つである。①は司教の空位期間中に世俗権力が行使する徴税権や教会保護権であり、②は司教の遺した動産の領有権、③は新司教の選出、聖別、叙任の権限であった³⁵⁾。

グレゴリウス改革以後、司教座の有する諸権限は教権と俗権とに区別され、フランス国王はローマ教皇の教権（spiritualia）に抵触する③の司教叙任については放棄する一方で、俗権（temporalia）に関する①、②の支配を強化したと考えられている。すなわち上記①、②を中心とする俗権が国王に帰属する権限（レガリア）として整備され、選挙で選出された新司教に国王がレガリアを委譲するシステムを構築したのである³⁶⁾。新司教の選出に当たっては、俗権の授与権を根拠に、国王は選挙民たちに選挙の許可を与え³⁷⁾、またその選出者を確認し、彼を叙任する許可を与えることができた³⁸⁾。

叙任権闘争の前後では司教座支配のあり方は少なからず変化した。が、いずれにせよ何らかのかたちで司教座は世俗権力に従属していた。グレゴリウス改革以前から、カペー王権の影響が及ばない地方都市においては、同様の支配が世俗諸侯によっても行われていたのである³⁹⁾。特に世俗諸侯との関係では、明確な司教所領を形成することのできた北フランスの一部の例外⁴⁰⁾を除いて、その教会領地が世俗権力により横領、強奪、没収されることも頻繁に起こっていた⁴¹⁾。他方、主としてイル＝ド＝フランス周辺には国王に支配され

地図1：ルイ7世治世末年（1180年）のフランス（部分）

渡辺節夫『フランス中世の政治権力構造の研究』、p. 557

M. Pacaut, *Louis VII et les élections épiscopales dans le royaume de France.*
を基に筆者作成。

た司教座が多く存在し、それらが〈王立司教座〉と呼ばれる。グレゴリウス改革以後はレガリアとは本来国王にのみ帰属する権限であるとする考えが浸透し、世俗諸侯らによる司教座支配にとっては不利な状況が生まれることとなった⁴²⁾。

ここで注意しなければならないのは、王立司教座とは、国王が当該司教座に対して何らかの書状などを付与して認定するような類のものではないということである。ある司教座が空位になったとき、そこで国王がレガリアの権利を行使したことが判明したとき、その司教座は便宜的に王立司教座と呼ばれる。したがって王立司教座であるか否かの判定は司教座のレガリアに関する史料の有無に左右され、研究者によってもその判定が異なる場合がある⁴³⁾。すなわち前述の、空位教会収入取得権、聖職者遺産没収権、あるいは新選出司教に対する認否権などを、国王が行使したことを示す史料が存在した司教座についてのみ、それは王立司教座と判定されるのである。

W・ニューマンによれば⁴⁴⁾、ユーグ・カペーの治世からルイ7世の治世に至るまで一貫して王立司教座を維持したのは、パリ、サンス、ノワイヨン、ラン、ランスの5司教座であり、また、この間ルイ6世の治世においてのみ王の支配から脱したのはシャルトル、オルレアン、ソワソン、モーの4司教座である。その他、初期ゴシック大聖堂の建設された町としては、サンリスはルイ6世、ルイ7世の治世に国王の支配から脱し、またアラスは逆にルイ6世、ルイ7世の治世に王立司教座となっている⁴⁵⁾。また、上記以外で長期にわたって王立司教座だった司教座としては、ユーグ・カペーの治世を除いて王立司教座であったオーセールと、フィリップ1世の治世を除いて王立司教座であったル・ピュイが挙げられる。

これらの司教座都市を概観すると、カペー朝初期からルイ7世に至るまで長期間にわたって王の支配下にあった司教座と初期ゴシック大聖堂が建設された都市とは、よく一致している。さらに王立司教座の総数は、ルイ6世統治下の9からルイ7世統治下の18へと倍増する(表1)。このデータだけを見れば、ルイ7世の治世における王権の司教座に対する影響力の増大が想定され、このことと初期ゴシック様式の繁栄とを結びつけることができるように思われる。だが表1の如く長いスパンで見たとき、王立司教座の総数はルイ6世の治世を除いてほぼ横這いである。すなわちこのことは、グレゴリウス改革の直中であつたルイ6世の治世にのみ司教座に対する介入が減ったものの、その後、前述のようなレガリアの整備により、再びルイ7世の治世では司教座との連携関係が生じたと考えられるべきであろう。ルイ6世とルイ7世の治世だけを比較して、これが司教座に対する影響力の増大を示していると断言するのは難しいといえる。

さらに、別のデータも存在する。国王の集会に列席した司教の数を調べたE・ブルナゼルによれば⁴⁶⁾、ルイ6世の治世からルイ7世

の治世にかけて、参席司教の延べ人数は107人から27人へと激減するのである。また、延べ人数ではなく、出席司教の所属する司教座の数で比較しても、24司教座から14司教座へと10減少している。ルイ6世の治世中には参席したがルイ7世の治世には一度も参席しなかった10の司教座には、サンリス、ラン、アミアン、ボーヴェなどが含まれる。旧フランクシア(イル＝ド＝フランス周辺)の司教が各王の治世中に一度も参席しなかった事例はルイ6世の治世までは皆無であつたといいい、司教層を重要なメンバーとする聖俗諸侯の合議に依拠したフランス国王の統治形態が変質し始めた様子がうかがえる⁴⁷⁾。王の集会からの司教層の離脱傾向を見ても、ルイ7世統治下における司教座に対する国王の影響力の増大を想定するのは難しいといえよう⁴⁸⁾。

さらに、ルイ7世統治下の司教座という大きな括りではなく、各司教座の司教個人とルイ7世の関係を細見したい。表2の6司教座⁴⁹⁾ではサンリス以外が王立司教座と考えられているが、それ以外の5司教座についても司教交代の都度、ルイ7世がレガリアの権利を行使しているわけではない。文献史料から明らかになっている限りでは、表の如く、国王によるレガリアの権利の行使(表、☆印)はごく僅かである。さらにこの限られた事例についても、これを大聖堂着工年代とあわせて見ると、ラン、アラス、パリの司教座に対して王のレガリアが行使されたのは、大聖堂再建工事の着工以前であり、工事に着手した司教の就任時には国王の介入はなかったことがわかる。また王の集会への司教の参席状況(表、下線)を大聖堂着工後に限って見ると、ノワイヨン司教ボードワンが1150年に、パリ司教モーリスが1169年にそれぞれ1回ずつ、サンス大司教ユーグが1153-55年に計4回参席しているが、これに対しサンリス、ラン、アラス司教は大聖堂着工後に一度も王の集会に出席していないことがわかる。

「教会関係の封土は世襲制ではなかったので、それらの司教を任命する王の権限は彼の権力を大いに増大させた⁵⁰⁾」ことがゴシック大聖堂の建設に結びつくものであったならば、大聖堂の建設を始め推進した司教とルイ7世との密接な関係が見られてしかるべきであろう。しかしながら以上の検討によれば、少数の司教を除いてルイ7世との繋がりは見られない。そればかりか、むしろルイ7世による司教座支配は軟化傾向にあったのではないかと考えられる。というのは、レガリアの重要な権利の一つである聖職者遺産没収権について、ルイ7世はしばしばこれを放棄しているのである(表、※印)。アリエノールとの結婚によりアキテーヌ公の称号を得たルイ7世は、同1137年、ボルドー大司教管区に属する司教座に対して当該司教座が遺産没収権の行使から免除されることを約束した。同様にパリ(1143年)、シャロン＝シュル＝マルヌ(1147年)、サンス(1156年、部分的に)、ラン(1158年)、プールジュ(1159年)

表1：王立司教座の総数および、王の集会への参席数

	Robert II (996-1031)	Henri I ^r (1031-1060)	Philippe I ^r (1060-1108)	Louis VI (1080-1137)	Louis VII (1137-1180)
王立司教座*	19	16	17	9	18
参席数	22 (延べ 73) **	22 (延べ 62) **	27 (延べ 161) **	24 (延べ 107) ***	14 (延べ 27) ***

* WM. Newman, *Le domaine royal sous les premiers Capétiens*(987-1180), p. 216.

** J.-F. Lemarignier, *Le gouvernement royal aux premiers temps capétiens* (987-1108), Paris, 1965, pp. 202-203.

*** E. Bournazel, *Le gouvernement capétien au XII^e siècle : 1108-1180*, pp. 189-190.

表2：初期ゴシック時代の司教たち

サンス(✧) (1140年以前)	Henri (1122-42), Hugues (1142 ^{*1} -68), Guillaume (1168-76), ^{*1} Guy (1176-93) (1153, 54, 55, 55)
ノワイヨン(✧) (1147-48年頃)	Simon (1123-48), ^{*2} Baudouin II (1148-67), Baudouin III (1167-74), Rainald (1175-88) (1140) (1150)
サンリス (1153年頃)	Pierre I (1134-51), Thibaut (1151-54), Amaury (1156-67), Henri (1168-85)
ラン(✧) (1155年頃)	Barthélemy (1113-51), ^{*3} Gautier I (1151-55), Gautier II (1155 ^{*2} -74), Roger (1174-1207)
アラス(✧) (1160年頃)	Alvise (1131-48), ^{*4} Hugues (1148?-50?), Godescalc (1150-61), André (1161-73), Frumold (1174-83) (1140)
パリ(✧) (1160/63年頃)	Etienne (1124-42), ^{*5} Thibaut (1144 ^{*3} -58), Pierre Lombard (1158-59), Maurice (1160-96) (1153) (1169)

✧印はルイ7世治世中、王立司教座であったことを示す。()内は推定着工年代。特に初期ゴシックに関係する司教座のみを採り上げた。ただし、ソワッソン大聖堂についてはルイ7世の治世中に建設された部分のうち現存するのは南袖廊だけであることから除外した。またカンブレ大聖堂は神聖ローマ帝国領内に存在したため、これも除外した。国王の集会に出席した司教には下線を引き、その年代を示した。

参考:M. Pacaut, *Louis VII et les élections épiscopales dans le royaume de France*, pp. 54, 66-67, 149-54; W. M. Newman, *Le domaine royal sous les premiers Capétiens (987-1180)*, pp. 216-223; E. Bournazel, *Le gouvernement capétien au XII^e siècle: 1108-1180*, pp. 189-190.

注 ☆1 国王のレガリアの明文化 (1176年); ☆2 選出司教の確認 (1148/49年); ☆3 選挙の許可 (1151年);

☆4 選出司教の確認 (1149/50年); ☆5 選挙への同意 (1143/44年)

※1 部分的に遺産没収権を放棄 (1156年); ※2 遺産没収権を放棄 (1158年); ※3 遺産没収権の放棄 (1143/44年)

の各司教座について、ルイ7世は遺産没収権の行使からの免除を約束している⁵¹⁾。前述の如く、パリ司教モーリス・ド・シュリーとラン司教ゴージェ・ド・モルターニュとともに、その遺産を大聖堂建設費用のために寄付したことが知られている。ルイ7世自身が、果たして大聖堂建設に役立てるために遺産没収権を放棄したかどうかは不明であるが、ラン・パリの両司教による遺産からの建設費用寄付はルイ7世による遺産没収権の放棄がなければならなかったことである。したがって、ルイ7世の意図は不明であるものの、むしろ王権による司教座支配が弱まったことが、ゴシック大聖堂の建設には有利に働いたと結論づけられる。

5. 結

以上の如く、初期ゴシックの司教座の多くとルイ7世とは王立司教座というかたちで関係を持っている場合が多かった。しかしながらその一方で、ルイ7世が大聖堂建設に金銭的な援助をした实例は少なく、また王立司教座と国王との関係性もむしろ希薄なものであったと考えられる。13世紀の聖王ルイの治世にパリがゴシック様式の中心となり、王権がゴシック様式の擁護者となったとするR・プランナーの指摘があるが⁵²⁾、これを12世紀のルイ7世と初期ゴシックの関係にまで拡大解釈することはできないであろう。むしろ遺産没収権の放棄に顕著に現れる、ルイ7世による司教座支配の軟化傾向により司教の有する諸権限が強化されたことが、結果的に大聖堂建設に結びついたと結論づけられる。

注

- 1) ゴシック様式と社会背景の関係性の指摘は、少なくともヴィオレ＝ル＝デュクにまで遡る。VIOLETT-LE-DUC, E. E., *Dictionnaire raisonné de l'architecture française du XI^e au XVI^e siècle*, t. II, réimpression, Paris, 1967, p. 281. 「12世紀末から13世紀初頭に建てられた大聖堂は、どこに見られるであろうか。それはノワイヨン、ソワッソン、ラン、ランス、アミアンなどの町であり、それらはすべて、最初にコミュン運動の烽火を上げたところであった。それはまたイル＝ド＝フランスの首都パリであり、君主権力の中心であった。それはまたルーアンであり、フィリップ・オーギュストが奪還したもっとも美しい地方の中心であった。」

- 2) H・フォション『西欧の芸術2 ゴシック(上)』神沢・加藤・長谷川・高田訳、鹿島出版会(SD選書)、1978年、p. 80; H・ゼーデルマイヤ『大聖堂の生成』前川道朗・黒岩俊介訳、中央公論美術出版、1995年、p. 55。
- 3) H・フォション、前掲書、pp. 4-9, 16; E・ランペール『ゴシック美術』辻佐保子訳、美術出版社、1965年、pp. 30-43; STODDARD, Whitney S., *Art and Architecture in Medieval France*, Icon Editions, 1972, p. 93. など
- 4) O・フォン・ジムソン『ゴシックの大聖堂』前川道朗訳、みすず書房、1985年、p. 54。
- 5) H・フォション、前掲書、p. 16。
- 6) H・ゼーデルマイヤ『大聖堂の生成』前川道朗・黒岩俊介訳、中央公論美術出版、1995年、p. 414。
- 7) 特に王権とゴシック様式の誕生について踏み込んだ議論をしたジムソンの前掲書と、ゼーデルマイヤの前掲書が、本稿の主たる再検証の対象である。
- 8) 本稿では初期ゴシック大聖堂として、サンス大聖堂(1140年以前)・ノワイヨンの大聖堂(ca. 1147-48)・カンブレ大聖堂(ca. 1150)・サンリス大聖堂(ca. 1153)・ラン大聖堂(ca. 1155)・アラス大聖堂(ca. 1160)・パリ大聖堂(ca. 1163)・ソワッソン大聖堂(南袖廊, ca. 1177)を想定している(カッコ内は着工年代)。このうちサンス大聖堂は、着工がルイ6世の治世であった可能性がある。
- 9) SASSIER, Yves., *Louis VII*, Fayard, 1991, pp. 15-16. レジーヌ・ベルヌー『王妃アリエノール・ダキテーヌ』福本秀子訳、パピルス、1996年、p. 23によれば、サン・ドニ大聖堂附属学校において。
- 10) SASSIER, Y., *op. cit.*, pp. 60-61.
- 11) このことは純粋な信仰心によるというよりは、2人の政治的ライバルに対抗する意図があったとも考えられる。DUBY, Georges, *France in the Middle Ages 987-1460*, trans. J. Vale, Basil Blackwell Ltd., 1994, p. 185.
- 12) フランス王はイル＝ド＝フランス地方に対して、単なる一諸侯として接していた面もある。渡辺節夫『フランス中世政治権力構造の研究』東京大学出版、1992年、p. 345。
- 13) J・ボニによれば、アリエノールとの結婚がカペー王領に安定をもたらレバリ周辺で初期ゴシック様式が誕生することとなったが、両者の離婚後、1150年代からは新様式の中心が王国の北と北東の境界及びその外側の南フランドルから南シャンパーニュに連なる工業・商業都市へと移動したという。BONY, Jean, *French Gothic Architecture of the 12th and 13th Centuries*, Berkeley, 1983, p. 119.
- 14) O・フォン・ジムソン、前掲書、pp. 62-67。
- 15) H・ゼーデルマイヤ、前掲書、p. 414。
- 16) 前掲書、p. 420。
- 17) ルイ7世と初期ゴシックの結びつきについて、ゼーデルマイヤとジムソンが共通して主張するのは、初期ゴシック大聖堂の多くが王立司教座で

- 建設されたということである。ゼーデルマイヤによれば、王立司教座の数はルイ7世に至るまで増加し、大聖堂の思想がそれらの司教座を通して伝播したという(H・ゼーデルマイヤ、前掲書、p. 422)。またジムソンによれば、教会関係の封土は世襲制ではなかったので、王立司教座における国王の司教任命権により、国王の権力が増大したという(O・フォン・ジムソン、前掲書、pp. 58-59)。本稿では、ルイ7世と王立司教座の繋がりに着目したこの二人の先行研究を中心的な検討の対象とし、これについて特に第4節で詳論することとする。
- 18) ジムソン、前掲書、pp. 81-83。
 - 19) BOURNAZEL, Eric, "Suger and the Capetians", P. L. Gerson(ed.), *Abbot Suger and Saint-Denis*, New York, 1986, p. 59.
 - 20) PANOFSKY, Erwin, *Abbot Suger on the Abbey Church of Saint-Denis and Its Art Treasures*, Princeton Univ. Press, 2nd ed., 1979, pp. 102-103.
 - 21) この〈市(Indicto)〉は、サン＝ドニ大修道院の保護の下に開かれた定期市であり、重要な収入源の一つであった。1109年、ルイ6世はこれに対抗して、パリとサン＝ドニの間に別の〈市〉を設置した。これによってサン＝ドニの〈市〉の収入は減少することになったが、シュジェの要請に従って1124年、ルイ6世はその管轄権をサン＝ドニ大修道院に譲渡したという(O・フォン・ジムソン、前掲書、pp. 68-69)。これはルイ7世ではなく、その先王の時代の出来事であるが、おそらく早い時期から大修道院の改築を計画していたシュジェにとって、フランス王の妥協は大修道院の建設費用に大きな道を開くことになったであろう。
 - 22) PANOFSKY, *op. cit.*, pp. 102-103.
 - 23) FORMIGE, Jules, *L'abbaye royale de Saint-Denis*, Paris : Presse Universitaire de France, 1960, p. 107.
 - 24) R・ブランナーによれば、13世紀半ばのフランスはその繁栄の頂点にあり、聖王ルイは十字軍のために年額250,000リーヴル、王室運営のために50,000リーヴルを費やすことが可能であったという。BRANNER, Robert, *St. Louis and the Court Style in Gothic Architecture*, London : Zwemmer, 1965, p. 3.
 - 25) LUCHAIRE, Achille., *Etude sur les actes de Louis VII*, Bruxelles, 1964, no363; MORTET, V. et DESCHAMPS, P., *Recueil de textes relatifs à l'histoire de l'architecture*, Paris : CTHS, 1995, pp. 731-732.
 - 26) M・オベールは1168年にルイ7世による寄付があったとするが史料などは示されておらず、詳細は不明である。AUBERT, Marcel, *Senlis, petites monographies des grands édifices de la France*, Paris : Henri Laurens, 1930, p. 21.
 - 27) A・リュシェールが編集したルイ7世の発行した勅書集成(LUCHAIRE, A., *op. cit.*) には、サンリス (no. 363) 以外に、大聖堂建設のための寄付に関するものは存在しない。
 - 28) KRAUS, Henry, *A prix d'or. Le financement des cathédrales*, Paris : Cerf, 1991, p. 34.
 - 29) ただし、この51年後には聖王ルイがサン＝ドニ大修道院に450,000リーヴルを寄付したことを考えると、200リーヴルの価値が連続的に低下している可能性もある。
 - 30) MORTET et DESCHAMPS, *op. cit.*, p. 750.
 - 31) B. M. Laon : ms. 341 : fo 133.
 - 32) ルイ7世の発行した勅書(LUCHAIRE, A., *op. cit.*) の中には、サンリスへの寄付を募る勅書が見られるのみである。むしろパリの実例のように勅書として発行されず、聖堂参事会の史料に寄付の事実が記されている可能性もあるが、註8で挙げたこれ以外の初期ゴシック大聖堂に関するいくつかの主要先行研究でも、その実例は知られていない。サンス : HENRIET, J., "La cathédrale Saint-Étienne de Sens, *Bulletin monumental*, t.CXL, 1982, pp.81-174.; SEVERENS, K. W., "The early Campaign at Sens, 1140-1145", *J.S.A.H.*, vol. XXIX, 1970, pp.97-107. / ノワイヨン : LEFÈVRE-PONTALIS, E., "Noyon", *Congrès Archéologique de France*, t. LXXII, 1905, pp.170-190.; SEYMOUR, C., Jr., *Notre-Dame of Noyon in the 12th Century*, Yale U. P., 1939. / ラン : BOUXIN, A., *La cathédrale Notre-Dame de Laon*, Laon, 1890.; CLARK, W.W. and KING, R., *Laon Cathedral*, London, 1983-7. / アラス : HÉLIOT, P., "Les anciennes cathédrales d'Arras", *Bulletin de la Commission royale des monuments et des sites*, t. IV, 1953, pp.7-109.; LE BOLAY, E. et DUCLOS, M. L., *Notre-Dame-en-Cité d'Arras*, Arras, 1999. / ソワッソン : LEFÈVRE-PONTALIS, Eugène, "Cathédrale de Soissons", *Congrès Archéologique de France*, t. LXXVIII, 1911, pp.318-337.; SANDRON, D., *La cathédrale de Soissons : architecture du pouvoir*, Picard, 1998. など。
 - 33) ジムソン、前掲書、pp. 58-59。
 - 34) ゼーデルマイヤ、前掲書、p. 422。
 - 35) 渡辺節夫、前掲書、p. 148。
 - 36) 前掲書、pp. 145-149。特に、p. 147を参照。「フランスで王が司教座を「新司教に与える(dare episcopatum)」という表現が各種文書から姿を消し、代わって「レガリアを委譲する(regalia dimittere, concedere)」という表現が一般化するのルイVII以降である。」
 - 37) 例えば1151年、ランの聖堂参事会員たちは、ルイ7世による選挙の許可を得るためにシュジェに書簡を送っている。NEWMAN, William M., *Le domaine royal sous les premiers Capétiens (987-1180)*, Paris : Sirey, p. 222.
 - 38) 渡辺節夫、前掲書、p. 149。
 - 39) 前掲書、p. 148。
 - 40) ランス、ラン、ノワイヨン、シャロン＝シュル＝マルヌなど
 - 41) 渡辺節夫、前掲書、p. 307。
 - 42) 前掲書、p. 149。
 - 43) 例えば、W・ニューマンが、ルイ7世の統治下でボーヴェ・テルーアンヌ・アミアン・サンリスが王立司教座でなかったと判断したのに対し、M・バコはこれら4司教座が王立であったと主張している。PACAUT, Marcel, *Louis VII et les élections épiscopales dans le royaume de France*, Paris : J. Vrin, 19, p. 67.
 - 44) NEWMAN, W. M., *op. cit.*, p. 216.
 - 45) M・バコによれば、サンリスもルイ7世の下で王立司教座である(PACAUT, M., *op. cit.*, p. 67.)。アラスは6世紀後半からカンブレ司教座に從属し、司教座は空位になっており、再び司教座が置かれたのが1093年のことであるので、ルイ6世以前に王立司教座であることを示す史料が存在しないのは当然のことである(HELIOT, Pierre, "Les anciennes cathédrales d'Arras", p. 13)。
 - 46) BOURNAZEL, Eric, *Le gouvernement capétien au XII^e siècle : 1108-1180*, Limoges : Presses universitaires de France, 1975, pp. 189-190.
 - 47) 渡辺節夫、前掲書、p. 143。
 - 48) 本稿、註17参照。
 - 49) 表2で除外したカンブレは、神聖ローマ帝国に属するためフランス国王との関係は存在しない。しかしカンブレ司教区はランス大司教管区に属し、また1144年のサン＝ドニ内陣の献堂式にカンブレ司教は出席していた。フランス国王との関係ではなく教会組織としての繋がりを見たとき、カンブレは初期ゴシックの他の大聖堂と、密接な繋がりを持っているのである。
 - 50) ジムソン、前掲書、pp. 58-59。
 - 51) PACAUT, M., *op. cit.*, p. 31.
 - 52) R・ブランナーによれば、パリがゴシックの形態にもっとも影響を及ぼす唯一の源泉となったのは1240年以降である。BRANNER, Robert, *op. cit.*, p. 112.

(2001年7月10日原稿受理, 2002年1月10日採用決定)